「相中相高百年史」より

（ 戦時体制下の相馬中学校 12）

１０　学徒動員：三年生（ 相中第４５・４６期生等 ）・・・ペンをハンマーに

《 横浜・海軍航空技術廠支廠へ出動 》

（３）製鋼部と射撃部に分かれて

我々の宿舎となった「白山道」に着いて四、五日してから、工場見学があった。まず、溶解工場を見た。つづいて鍛錬工場に入ってみて驚いた。この中に三日とはいられないだろうと思うようなたいへんな暑さだ。その工場の名は「製鋼部鍛錬工場」中にあるのは日本有数の三千トンプレスや千五百トンプレスだ。頭上には相応の起重機。両側にはインゴットやビレットを入れて焼く炉。特攻兵器「〇大」をつくっているそうだ。こういうところで働くのはごめんだと思った。ところが、このものすごい現場に三年乙組の**加藤敏**(※1) 等が配属になった。当時の彼のことを次に紹介しよう。

一日十二時間労働だった。仕事が終わると、煙突掃除夫さながらの真っ黒い顔になる。三ヶ月後には夜勤。分厚いズックの手袋をかけ、履物はズックの白足袋と手製の下駄だ。焼けて黒ずんだビレットの上を歩く時は、煙は出るがこの下駄に限る。靴は駄目である。何と素晴らしい知恵だ。どれ程暑くても下着一枚は絶対に脱げない。熱いスチールでいつ火傷するかわからない。小さい怪我は殆どないが、一つ間違えば死を招く。起重機の裸電球（高圧）にふれて死んだ二人の工員。五号プレスの蒸気タンクの爆発時の恐ろしさは、今思い出してもゾッとする。

「いくばくの　期待抱きし我が職場　　鍛錬工場は黒くかすめり」　　大野弘伸(※2)

牛来正彦（旧姓**杉本**）(※3) は、製鋼部鍛錬工場工具班に配属になった。それを紹介しよう。

……　服装は、火傷を防ぐための差し子の手袋、キャンバス足袋に手作り下駄をはいた鍛冶屋のいでたち。仕事は大型旋盤用のバイト盤にバイスを焼き付けて油熱処理する作業だった。高熱処理のため油が跳ねて服に染み、火玉が走り焼け焦げた服はボロボロ、しかも交換も儘ならず、外出もためらうほどだった。特に、この鍛錬工場のガス発生炉は重要な施設のため、一時も石炭供給を止めることは許されない状況下にあった。が、トラック運搬が間に合わず、他班の支援要請には、いつも学生が割り当てられ、雨の日も風の日もトラック運搬の上乗りが続いた。

……工場長の『特命』があり、班長から「至急五千本の槍を納品せよ」との命令伝達があった。増員もなく、二交替勤務で、現在の作業で一杯のところに『特命』とは至難のことであった。しかし、やるしかない。鋼材は特殊鋼を使い、真っ赤に焼かれ、プレス機で繰り返し鍛錬し、小鍛冶によって一本一本成型する。焼き入れと研磨仕上げの工程は、時間は掛かるが省略する事は出来ない。全員一丸となって奮闘し、汗と涙の結晶「五千本の槍」は完成……

松野裕(※4) の体験は次のようなものである。

1944（昭和 19）年十一月末に、第二陣として相馬を出発し皆と合流した。支廠では、製鋼部現場分析室に配属になった。主に酸を使って鉄の成分を調べる仕事であり、日勤で残業は二時間程度であった。寮に帰ると暖房もなく、しかも毎晩のように空襲警報があって、そのつど毛布一枚持って防空壕へ退避した。

そんな中で、昭和 20 年三月下旬、突然、急性虫垂炎となり「リヤカー」に乗せられ、追浜の海軍病院に運ばれて、開腹手術を受けた。所要時間は約二十分、すでに「手遅れ」だったために傷口は縫合せず切開したままだった。……腹膜炎を併発したため下腹部膨張で苦しかった。追浜病院は完全看護ではあったが、家族による看護を病院が特別に認めてくれたので、母が相馬から横須賀に来て付添い看護に当たってくれた。腹膜炎には、「馬葡萄の酢漬け汁で湿布するとよい」と聞いて、相馬からわざわざそれを持ってきて懸命に湿布してくれたので、快復は思いのほか早かった。

入院二〜三日後に番茶少々、その後一ヶ月半位は重湯少々。母はこの間、二、三回相馬に戻り生卵を持ってきて、お粥にまぜて食べさせてくれた。有り難かった。卵は簡単には手に入らない貴重品だった。今ではとても想像できないことである。入院期間中も空襲はひっきりなしにあって、その度に真っ暗闇の中二人の若い看護婦に、防空壕まで運んで貰った。

五月に入り、漸く歩けるようになった。……退院することができた。寮に母と一泊して帰省し、仙台の鉄道病院で治療を続けることになった。帰省後は、東北本線増田駅（現在の名取駅）から仙台に通って治療して貰った。「バカ肉」（瘢痕ケロイド）は何回か切り取ってもらったが、その度に痛い思いをした。七月九日から十日にかけて、仙台も大空襲を受け、焼け野原となってしまった。さらに八月に入ると、早朝からグラマンが超低空（米兵のパイロットが肉眼で見えた）で侵入し、雨あられのように機銃掃射をあびせてきた。生きた心地はしなかった。……

濱須篤義（※5）は、出発に先立って行った健康診断で急性肺炎と診断された。動員先の工場で、銃後の守りを固める積もりでいただけに、仲間と一緒に行動できない悲しさ悔しさは、絶望のどん底に落とされた感じだったという。

山羊の乳（当時貴重品だった）が健康快復には一番良いと聞かされた母は、毎日四合瓶一本ずつの乳を上渋佐の知人より分けて貰い、それを飲んでようやく彼は元気を取り戻した。そのため皆より二ヶ月遅れはしたが白山道に馳せ参じ、先発の仲間である今村・相良・平間・菊地政次・杉内祥泰の各君等と合流することができた。……

戦況は日ごとに激化し、漸次敗色濃厚になるにつれ、東京方面は、日中でもB29の飛来する日が次第に多くなった。都会のド真ん中で、空襲にあったときは、隠れ場所はトラックの下しかなかった。いつも四人一組で、二人が運転席、あとの二人は荷台に乗り。東京方面に行く時は朝八時出発、帰りは夕方の六〜七時頃となり、……

佐藤和男（※6）（旧姓**西个男**）は、射撃部に配属になった。毎日、釜利谷との境にある山際の射撃場で、機銃の初速の測定をしていた。空襲があると、敵機を迎え撃つために射撃場の裏山の銃架に即刻駆け登った。この銃架は「連山」のものを転用していた。その当時としては最新式で12.7粍機銃を二基装備していた。この銃架は梯型の小さなハンドルを両手で握り、左右に回すと機銃が身体と共に回り、ハンドルを上下に動かすと、銃口が上下する油圧式のものだった。親指の所に赤いボタンがあり、これを押すと弾丸が連続して発射される仕組みになっていた。

早春のある日、グラマンP51が支廠の背後から追浜方面に突っ込み、頭上を何回も旋回した。夢中で撃ちまくったので、弾丸の残りが少なくなり、その補充に迫られた。そこで、ピストル着装の海軍将校とトラックに飛び乗り、空襲警報発令中にもかかわらず、交通の全く途絶えた逗子街道を全速力で池子弾薬庫に向かった。弾薬庫は、池子トンネルを通り神武寺駅を右折したところにあった。

厳重に防護されている弾薬庫は、山々に囲まれている広大な盆地上の平地に作られていて、そこには道路が縦横に走り、回りの山々の無数のトンネルに通じていた。……弾薬庫の中は、狭い入り口とは対照的に、天井は高く体育館のように広々としていた。床はトラックの荷台の高さと同じに作られ、弾薬箱の積み降ろしが容易であった。木の香りのする弾薬箱が、天井に届くほどうずたかくつまれていた。

こんな危険極まりない仕事も、動員学徒に課されていたのである。このように、動員先での相馬中学生は、いろいろな危険に遭遇し、いつもひもじい思いをしながらも、真っ黒になって、真剣に働いていた

（※1）中第45回　昭和21年卒　新地出身
（※2）中第46回　昭和22年卒　中村出身
（※3）中第45回　昭和21年卒　石神出身
（※4）中第45回　昭和21年卒
（※5）中第45回　昭和21年卒　原町出身
（※6）中46回　昭和22年卒　上真野出身

（選択転記）